

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 28 日現在

機関番号：32641

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008 ～ 2011 年度

課題番号：20530607

研究課題名（和文） 高校生における進路選択に伴う時間的展望の変化プロセスの研究

研究課題名（英文） A study on changing process of time perspective in a period of career choice during the transition from high school.

研究代表者

都筑 学 (TSUZUKI MANABU)

中央大学・文学部・教授

研究者番号：90149477

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、高校卒業にともなう時間的展望の変化について、4年間にわたる調査データを分析することによって明らかにすることであった。

調査の対象者は、東京都の市部に所在地のある都立高校9校に在籍する高校3年生の生徒4,756人、高校卒業後の調査に参加した大学生・社会人のべ1,622人、総計6,378人だった。2008～2011年にかけて本調査3回、縦断的調査3回が実施され、時間的展望の変化過程やそれに影響する要因が明らかにされた。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to clarify changing process of time perspective during the transition from high school by a four-years longitudinal study. The participants were 4,756 third grader of nine high schools, who lived in the suburban districts in Tokyo. One thousand six hundred twenty two participants also completed the questionnaire by post mail study after graduate from high school. The obtained data showed changing process of time perspective during the transition and possible factors which affected this process.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
2009年度	700,000	210,000	910,000
2010年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2011年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・教育心理学

キーワード：時間的展望、進路選択、環境移行、高校生、縦断調査、学校適応

1. 研究開始当初の背景

時間的展望とは、個人の過去・現在・未来についての見解の総体であり、個人の行動を方向づけ、動機づける機能を担っており、児童期から青年期にかけて著しく発達する。青

少年の人格発達をとらえる上で、時間的展望はきわめて重要な概念である。

研究代表者は、これまでに、青少年を対象とした時間的展望の研究を20数年にわたっておこなってきた。時間的展望研究の課題と

して、目標の階層構造や時間経過にともなう階層構造の変化を検討することの重要性を理論的に提起し、一連の実証的研究を集大成して、大学生の時間的展望の特徴を明らかにするとともに、時間的展望についての心理学的構造モデルを提起した(都筑学 1999 大学生の時間的展望 —構造モデルの心理学的検討— 中央大学出版部)。

研究代表者は、上記のような研究関心をさらに発展させ、環境移行にともなう時間的展望の変化を縦断的に研究することが重要であると考え、これまでに3つの科学研究費補助金を受けて、本研究に密接に関連した研究をおこなってきた。第1は、大学卒業に伴う時間的展望の変化の研究であり、その研究成果は科学研究費学術図書出版助成を受けて刊行された(都筑学 2007 大学生の進路選択と時間的展望 —縦断的調査にもとづく検討— ナカニシヤ出版)。第2は、小学校から中学校への学校移行に伴う時間的展望の変化の研究である。第3は、中学校から高校への学校移行に伴う時間的展望の変化の研究である。本研究によって、小・中・高校・大学に関連する4つの環境移行に伴う時間的展望の縦断的变化が検討されることで、児童期から青年期にかけての時間的展望の発達過程が明らかにされる。

従来、高校生を対象とした時間的展望の研究は数少なく(佐藤, 1995; 大家, 1996; 白井, 1997; 河野, 2003; 日潟・齊藤, 2007)、その実態は十分にわかっていない。最近では、教育社会学の分野において、佐藤・深堀・本田ら(2005)、中村・片山・西田ら(2005)、小林・藤村・濱中ら(2006)、乾(2006)が、高校生の進路選択について縦断的調査をおこなっているが、時間的展望との関連性は明らかにされていない。

本研究課題は、従来結びつけて検討されてこなかった、高校生の進路選択と時間的展望を組み合わせる実証的に研究するものであり、発達研究として大きな意義をもつものであるといえる。

2. 研究の目的

従来の研究では、高校卒業に伴う進路選択過程における時間的展望の時系列的な変化過程について、縦断的調査によって実証的に検討したものはない。こうした未開拓な研究分野に取り組もうとする本研究は、実証的にも理論的にも時間的展望研究の最先端を行くものである。本研究を通じて、高校生が進路を選択する過程で、どのような時間的展望を持ち、自分や社会の将来について考えてイメージしているかという実態が明確になっていくことが期待できる。

本研究は、研究代表者がこれまでに実施し

てきた時間的展望研究から得られた実証的・理論的成果と研究方法論にもとづきながら、高校生が高校を卒業し、大学・専門学校への進学や社会人としての就職を経験する時期に焦点を絞り、縦断的な質問紙調査を実施することによって、生徒の進路選択と時間的展望との関連について検討する。本研究では、4年間の研究期間で、縦断的調査を実施することで、以下の3点を明らかにすることを目的とする。

(1) 高校卒業に伴う進路選択が時間的展望に及ぼす影響の検討

高校3年生から卒業後1年目にかけての個人の縦断的調査データを分析することによって、高校卒業という環境移行期における時間的展望の発達を明らかにするとともに、生徒の進路選択が時間的展望に及ぼす影響について明らかにする。大学進学や就職という進路選択の違いによって、時間的展望がどのように異なっているかを明らかにする。

(2) 高校から大学・社会への移行期における時間的展望の縦断的变化の検討

高校卒業後2年目以降の縦断的なフォローアップ調査データを分析することによって、高校卒業時点における進路選択が、その後の大学生活や社会生活における時間的展望に及ぼす持続的な影響について明らかにする。

(3) 時間的展望の発達過程における因果的モデルの検討

3つのコホートにおける縦断的データを総合的に検討して、時系列的な因果関係分析をすることによって、高校在学時から卒業後にかけての時間的展望の発達に関する因果的モデルを構成する。

3. 研究の方法

本研究では、高校卒業前後の環境移行に伴う時間的展望の変化を、縦断的調査のデータにもとづいて検討するために、①高校での質問紙調査、②継続的な調査協力者の募集、③郵送法によるフォローアップ調査、の3つを組み合わせる実施した。

本調査は、2008年～2010年の10～12月にかけて、東京都立の9つの高校3年生を対象に、クラス単位で実施した。

2008年	1,724人	(第1コホート)
2009年	1,630人	(第2コホート)
2010年	1,423人	(第3コホート)
合計	4,777人	

縦断調査は、本調査において、その後の調査に対して継続的な協力を申し出てくれた対象者には、住所と氏名を記入するように求めた。その情報にもとづいて、郵送法により高校卒業後の調査(10～12月)を実施した。対象者に人数は下記の通りである。

2009年 392人（第1コホート）

2010年 266人（第1コホート）
303人（第2コホート）

2011年 191人（第1コホート）
203人（第2コホート）
267人（第3コホート）

本調査

- (1) フェースシート 調査日、学年、性別。
- (2) 自己意識
- (3) 時間的展望
- (4) 学校生活意識
- (5) 周囲の人との関係
- (6) 不定愁訴
- (7) 高校卒業後の希望進路
- (8) 高校卒業後の進路意識
- (9) 縦断的調査への協力願い 継続して調査に協力してもらえる場合には、住所・氏名・電話番号の記入を求めた。

縦断的調査

- (1) フェースシート 調査日、性別、高校卒業後の進路。
- (2) 自己意識
- (3) 時間的展望
- (4) 不定愁訴
- (5) 父母との関係
- (6) 能力・適性
- (7) 社会観
- (8) 進路意識
- (9) 現在の生活
- (10) 身近な人との関係
- (11) 生活の中での時間意識
- (12) 時間の使い方の満足度
- (13) 通っている大学の種類
- (14) 起床時間と就寝時間
- (15) 縦断的調査への協力願い 継続して調査に協力してもらえる場合には、住所・氏名・電話番号の記入を求めた。

4. 研究成果

(1) 進路選択と時間的展望の関係

高校3年生における卒業後の進路希望は、4年制大学、短大、専門学校・各種学校への進学希望が9割を超えていた。約10人に7人が4年制大学への進学を希望していた。就職希望者は約5%だった。希望進路には性差が見られ、男子は女子よりも4年制大学への進学希望者が多く、女子は男子よりも短大、専門学校・各種学校への進学希望者が多かった。希望する進路によって、時間的展望の持ち方が異なることがわかった。男子の就職希望者は、将来への希望が強かった。女子の専門学校・各種学校への進学希望者は、将来への希

望や将来への志向性が強かった。4年制大学への進学希望者は、将来目標を持ちたいという欲求が強かった。一方、卒業後の進路未定者は、将来への希望が弱く、空虚感が強く、計画性も低いことがわかった。

進路選択行動・意識の高・中・低群を比較したところ、高群は時間的展望の5つの下位尺度の全てにおいて最も肯定的な傾向を示し、低群が最も否定的な傾向を示していた。

高校3年生と卒業1年目の縦断的データの分析から、高校卒業にともなって、将来への希望や志向性は弱まっていくが、将来目標を持ちたいという欲求は強まっていくことが明らかになった。

同じ縦断的データを用いて、時間的展望の5つの下位尺度ごとにクラスタ分析したところ、高校卒業前後において、高い水準の得点を維持し続ける者と低い水準に止まり続ける者、両者の間で変化する者がいることがわかり、高校卒業という環境移行に影響を受けにくい時間的展望の個人差が存在することが明らかになった。

4年制大学と短大への進学者、受験浪人との比較では、時間的展望において差異が見られ、それらは進学先での新しい環境下での心理や進路が未決定である心理に影響を受けていると考えられた。

遅延交差効果モデルによる縦断的データの分析から、高校卒業前後での自己価値と時間的展望は相互に影響を及ぼし合う関係にあることがわかった。信頼できる他者の存在と時間的展望との関係は、高校での時間的展望が卒業後の信頼できる他者の存在に影響するという一方向的なものであることがわかった。

(2) 時間的展望の縦断的变化および個人差

3年間ならびに4年間の縦断的データの分析から、時間的展望が最も大きく変化するの

は高校3年生から卒業1年目にかけての時期であることがわかった。高校卒業前後において、男子では、将来への志向性が弱まり、女子では、将来への希望や志向性が弱まる一方で、将来目標の渴望が強まることがわかった。3年間ならびに4年間の時間的展望の変動タイプをクラスタ分析によって抽出したところ、5つの下位尺度のそれぞれにおいて、高水準の得点を維持する者と低水準に止まる者、その間で変動する者が存在することが明らかになった。それらの変動タイプのうち、「将来への希望」「将来への志向性」「計画性」において高群と低群を比較したところ、高群は低群よりも、自己意識の4つの下位尺度（自己価値、信頼できる他者の存在、自己否定、自己への満足感）において、肯定的な反応傾向を示すことがわかった。「空虚感」低群は高群よりも肯定的な反応傾向を示し

ていた。「将来目標の渴望」高群は低群よりも、自己への満足感が強いが自己否定も強いという矛盾した結果だった。

(3) 時間的展望と自己意識、能力・適性観、社会観、小中学生の頃の活動との関係

高校3年生の時間的展望の高・中・低群を5つの下位尺度ごとに比較したところ、「将来への希望」「将来への志向性」「計画性」の高群と「空虚感」の低群は、自己意識の4つの下位尺度の得点が最も高いことがわかった。「将来目標の渴望」の高群は、自己否定が強い一方で、自己への満足感も低いことがわかった。

卒業1年目の時間的展望の高・中・低群を5つの下位尺度ごとに比較したところ、高校3年生の結果とほぼ同様の結果が得られた。

時間的展望と能力・適性観との関係については、「将来への希望」「将来への志向性」「計画性」の高群は低群よりも、自分の能力や発達についての可能性を強く感じていることが明らかになった。「空虚感」の低群と高群との間にも、同じような傾向が見られた。「将来への希望」や「将来への志向性」の高群は低群よりも、学校での勉強だけで人間の能力を見てはいけないと思っていることもわかった。

時間的展望と社会観との関係については、「将来への希望」高群と「空虚感」の低群において、この社会において努力が報われ、弱者が大切にされる夢のある国民が主人公の社会だとより強く思っていることがわかった。

「将来への希望」と「将来への志向性」の高群は共通して、小中学生を振り返ったときに、「自分の意見を発表する」「たくさんアイデアを出す」「わからないことや知らないことを調べる」「自分の考えを文章にまとめる」「いろいろな友だちと仲良くなる」「リーダーシップを発揮する」の得点が高かった。小中学生の頃の能動性や社会性が、将来への希望や志向性の形成に対して肯定的な影響を及ぼすのではないかと考えられる。

(4) 日頃の時間の使い方と時間的展望との関係

日常的な時間の使い方についての満足度を高群、中群、低群の3群に分類して分析したところ、時間の使い方の満足度が高いほど、起床時刻も就寝時刻も早く、早寝早起きの習慣があることが明らかになった。また、時間の使い方の意識についても3群間に差が見られ、時間の使い方の満足度の高いほど、ダラダラと時間を過ごさずに規則正しく、メリハリをつけた生活を送っていることがわかった。満足度が高いほど、思いついたらすぐに実行に移す行動力や約束の時間を守るとい

う時間管理の点で高い自己評価をしていることもわかった。

時間の使い方の満足度が高いほど、「将来への希望」や「将来への志向性」「計画性」の得点が高く、「空虚感」は低くなっていた。「将来目標の渴望」に関しては、時間の使い方の満足度低群が最も高くなっており、中・高群となるにつれて低くなっていた。将来目標への欲求は、すでに持っているから当面はこれ以上不要であるという意識や、目標がないから何か欲しいという意識など、いろいろな理由から生じてくる可能性がある。時間の使い方の満足度と将来目標の渴望との間の結果にも、そうしたことが反映されているのかもしれない。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計3件)

① Tsuzuki, M. 2012 Career development and time perspective in high school students. (Invited symposium) Paper presented at the First International Conference on Time Perspective. Coimbra, Portugal.

② 都筑学 2009. 11. 01 高校生の時間的展望の研究 日本心理学会第72回大会発表論文集 北海道大学

③ 都筑学 2010. 11. 1 高校生の進路選択が時間的展望の与える影響 日本青年心理学会第18回大会発表論文集 22-23. 至学館大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

都筑学 (TSUZUKI MANABU)
中央大学・文学部・教授
研究者番号：90149477

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：